黒崎卓・子島進・山根聡編著

『現代パキスタン分析――民族・国民・国家――』

岩波書店　2004年　xiii＋294ページ

牧野百恵（まきのもも え）

はじめに

本書は冒頭で，パキスタンの国家と国民との間のギャップを指摘する。1998年５月の核実験，99年10月の軍事クーデタ，2001年９・11同時テロ事件後のアフガニスタン空爆，2002年５月にカシュミールをめぐって緊張が高まったインドとの対立など，一般的に我々がパキスタンに関して耳にする情報はポジティブなものが少なく，危険で脆弱な国というイメージが定着しても不思議はない。一方で国民に視点を移すと，「経済的には決して豊かとは言えないにしても，一定の安定感をもって人々の生活が営まれて」（１ページ）おり，本書はそれを国家と国民との間のギャップとする。

国家と国民との間のギャップは，パキスタンに行ったことがある者なら誰しも感じることではないかと思う。評者自身がそれを感じたのは，パキスタンを初めて訪問した2002年10月，民政移管の総選挙の最中であった。パキスタンは1947年の建国以来，軍事政権を４度も経験しており，穏健に行われた政権交代が少ない。初代首相のリヤカート・アリー・ハーンは暗殺され，Ｚ・Ａ・ブットーはズィヤーウル・ハク軍事政権によって首相職を追われた後処刑され，そのハク大統領も不可解な飛行機事故で亡くなった。そのような歴史を抱えるパキスタンでの民政移管の総選挙であるから，さぞかし盛り上がるだろうと想像していた。ところが実際に訪れてみると，あまりの盛り上がりのなさに拍子抜けした。民政移管という重大な意義をもつわりに，汚職・特権政治の歴史のせいからか政治不信が強く，総選挙に対する国民の関心があまりに低いのだ。在地権力が強いパキスタンでは，選挙が実施されても地主の影響によって票が買収されることが多く，そもそもムシャラフによるクーデタ以前から「パキスタンに民主政府があったとはいえない」との見方が一般的という［井上 2000, 2］。一方で，政治に距離をおく国民は決して卑屈になるわけでなく，自分たちの生活の向上のため力強く生きている。このような状況を目の当たりにした評者のパキスタンに対する第一印象は，国民が国家に頼らずかなり独立して生活しているというものであった。

本書では，国家と国民との間のギャップが存在する理由として，「民族という基盤が，一定の自律性を人々の生活に与えている」（16ページ）ことを挙げる。パキスタンは1947年にイスラームを統合の原理としてインドから分離独立したが，初めから，様々な地域・民族といった，求心性に対して反発する要素を多く抱えており，国家の成立自体に無理があったかのような論調が多い。本書の試みは，「民族・地域の自律性」に着目することで，これまで国家創造にとってマイナスと見なされてきた多様な民族のダイナミズムをポジティブに捉え，パキスタンの豊かさや潜在的可能性を明らかにすることである。そしてまた本書は，政治学，歴史学，経済学，地理学，言語学，文化人類学，文学など，専門を異にする研究者が執筆を担当することで，様々な分析視角を提供することも試みる。

Ⅰ　本書の構成と内容

本書の構成と，各章の執筆者は以下のとおりである。

序　章　パキスタンの民族と国家（子島進・山根聡）

第Ⅰ部　国民の成立

第１章　パキスタン統合の原理としてのイスラーム（井上あえか・子島進）

第２章　バローチ民族の自由をかけた闘いとパキスタン支配（村上和之）

第３章　地域語のエネルギーに見る国民統合と地域・民族運動（萬宮健策）
第４章　国語ウルドゥーとその文学の評価を巡る地域差（山根聡）
第Ⅱ部　地域・民族の深層へ
第５章　パンジャービー民族の自文化表象とイスラーム――聖遺物の展示をめぐって――（小牧幸代）
第６章　宗教マイノリティから見たパキスタン――パンジャーブにおけるクリスチャンの事例――（森川真樹）
第７章　北西辺境州農村経済の特色と国家・階層（黒崎卓）
第Ⅲ部　地域・民族を超えて
第８章　ムスリム資本家とパキスタン――ネットワークの歴史的形成過程と地域・領域への対処――（大石高志）
第９章　社会開発から探る民族の可能性（子島進）
終　章　国民の将来，民族の可能性（黒崎卓）

序章は，前述した「民族・地域の自律性」に着目することでパキスタンの豊かさや潜在的可能性を検討するという本書の試みを明らかにする。イスラームと民族，パンジャービーとウルドゥー語，自律性を求める民族の動きと州編成の各節を設けることで，イスラームまたはウルドゥー語をもって国家統合を目指す中央政府またはそこで優位を占めるパンジャービーと，多様な地域・民族とが複雑に絡み合って構成されているパキスタンをまず描き出したうえで，各章の位置づけを行っている。

第Ⅰ部では，パキスタンの中央政府または統合への動きと，様々な地域・民族がいかに交錯してきたかを扱う。第１章は，国家統合の原理としてのイスラームについて詳述する。パキスタンは，イスラームをもって多様な地域・民族を統合する原理としているが，現実のイスラームは地域・民族によって様々な顔をもって現れている。筆者は，イスラームの解釈が様々でありその政治的位置づけが不確定であることや，それが政治権力によってしばしば利用されてきたことを理由として，統合の原理としてのイスラームを過小評価してはならないと指摘する。パキスタンのような多種多様な地域・民族を抱える国にあっては，普遍性と多様性を内包するイスラームであるからこそ統合の原理として機能しうるからであるという。第２章は，バローチ人が民族の自由を守るために，イギリス人による支配や中央政府による侵略に対し死を賭して闘ってきたことを，叙事詩をとおして明らかにする。イスラームとマヤール（バローチ人の慣習法）とは相反するものではないが，マヤールをバローチ人の行動規範とすれば，イスラームを掲げて統合を目指す中央政府に対する抵抗についても，異教徒に対するのと同じように説明することができる。第３章は，スィンドでの言語・民族運動を中心に取り上げ，それがウルドゥー語を国語として統合を推し進める中央政府の干渉に抵抗してきたことを詳述する。筆者は，統合を目指す中央政府が，地方の民族運動を抑えようとして逆に反発を招いてきたことのデメリットを認識し，地方の言語や文化の振興・発展に協力することの必要性を説く。第４章は，国語であるウルドゥー語の地域差を，ウルドゥー語教育，ウルドゥー詩のテーマなどをとおして詳述する。ウルドゥー語は，インドのデリーで生まれ育まれた言語である点で，ムハージル（建国時にインドから主にカラーチーに移住した者）がその正統な後継者であるが，パキスタンにおけるウルドゥー文学は，建国前からパンジャーブ州の州都ラーホールで実質的に発展してきた点で，パンジャービーが主流の担い手である。筆者は，カラーチーとラーホールのどちらのウルドゥー語が正しいのかという対立は，一見パキスタン文化の統一にとってマイナスであるように見えつつも，対立こそがウルドゥー語・文学が民族・地域を超えて発展していく契機となりうるという視点を提示する。

第Ⅱ部は，地域・民族の多様性そのものにより深い視点をあてる。第５章は，ラーホールのバードシャヒー・マスジド（「皇帝のモスク」の意）に所蔵されている聖遺物コレクションを取り上げ，他のイスラームの聖遺物コレクションと違い，それがなぜ博物館のような展示方式をとっているかの分析を

試みている。筆者は，バードシャヒー・マスジドの聖遺物は，展示されることで，対内的にはパキスタンにおけるパンジャービーの優位性を示し，対外的にはイスラームを通じて国民統合とムスリム共同体との結びつきを強める機能を果たすという。第６章は，パキスタンの宗教マイノリティのなかで最大の人口をもつクリスチャンを取り上げ，彼らが宗教よりは改宗以前のカースト出自により差別されていることを，クリスチャンの間に存在するヒエラルキーなどをとおして論証する。筆者は，ムスリム，クリスチャンといった宗教の相違で差別，被差別を単純に結論づけるのではなく，かつてのカースト序列に基づくヒエラルキーの存在に本質を求めるべきとする。第７章は，比較的高い経済成長率にかかわらず，ミクロのレベルでは貧困が悪化したことの背後に，地主と土地なしなど階層間の分断が根深い社会構造と，そのような社会構造に対して国家が無力であり続けていることを論証する。筆者が実施した北西辺境州農村部の世帯調査では，地縁・血縁といった私的なセーフティネットに頼らざるをえない農村経済が明らかにされ，さらに国家の無力と階層間の分断が，民族間や宗派間の対立にすり替えられているという仮説を提示する。

第Ⅲ部は，地域・民族を超えたネットワークの可能性を扱う。第８章は，事業家や商人層などのムスリム・コミュニティの歴史的変遷をとおして，パキスタンという国家またはパキスタン人という国民のあり方を相対化することを試みている。印パ分離独立の時期，ムスリム資本家層は，インドやパキスタンを含むアジア諸国やアフリカの諸国のなかから，事業展開の地としてパキスタンを選択したが，現在に至るまで，国家の枠組みを超えて複数の地域を結びつける新たなネットワークを模索している。第９章は，パキスタンにおけるNGOやCBO（Community-Based Organization）の活動が，特定の民族やコミュニティを基盤としつつ，その独自の価値観が新しい価値観と接合し変容することで普遍的モデルへと格上げされていく事例をとおして，より広い社会的コンテキストで展開しうる民族の可能性を論じる。筆者は，民族意識に加え，排他的ではなく博愛的なムスリム意識が，活動の拡大に寄与する潜在的可能性をもつという。

終章は，本書の最大の意義を，イスラームという宗教を理由にインドから分離独立したパキスタンが，「どのようにして民族と国民とを統合し，紆余曲折を経つつも国家として存続してきたかを明らかにしたこと」（286ページ）と明言する。その一方で，本書に残された課題として，インターディシプリナリーな分析としての総合性が不十分であったこと，現代パキスタンの国家・国民・民族を考えるうえで重要な，国際関係，軍の分析，ジェンダー関係などを扱わなかったことの２点を挙げる。

Ⅱ　本書の評価

パキスタンにおける民族の潜在的可能性を明らかにするという本書の目的は，様々な分析視角をとおして達せられたと評者は考える。以下では，とりわけ本書が与える，⑴民族の多様性が国家の統合という命題と必ずしも矛盾しないこと，⑵民族・宗教に問題の責めを帰さず，その他の本質的な要因を探ることが重要であること，という２つの視点に注目したい。

イスラームは，「多民族国家パキスタンの国民的統一に役立つ要因としてもっとも重視された」[加賀谷・浜口 1977, 187] が，それだけで国民統一の絆とはなりえないことを独立後のパキスタンの歴史は証明した。1971年のバングラデシュ独立はその際たる例である。多様な民族が混在していることから，一見すると，イスラームであっても統合の原理としては役不足のように見える。しかしながら，第１章が展開する，普遍性と多様性を内包するイスラームであればこそ，多様な民族を抱えるパキスタンにあって統合の原理として機能しうるのだという主張は，統合の原理としてのイスラームが画一的な価値を与えねばならないかのようなこれまでの議論に対して，新たな視点を与えている。これまで，国家統合という名のもとに推し進められてきた政策を見ると，結局は大が小を抑圧する政策である。ハク政権は国民統合をイスラームの名において推進したが，パン

ジャービー以外の民族はその統合政策を「パンジャーブ化」と見なした［佐藤 1992, 192］。第２章，第３章で詳述されるように，パキスタン国家統一にとって危機となるような動きは，主に大が小を抑圧しようとすることに対する反発として起こってきた。本書は，様々な民族が共存し多様性を許容してこそパキスタンがひとつの国家でありうることを，我々に認識させてくれるだろう。

パキスタンは多様な民族・地域によって構成され，これに異なる宗教・宗派などが加わり，異なる民族またはコミュニティどうしの対立が絶えない。民族に非常に敏感にならざるをえないパキスタンでは，首相と大統領が同じ民族出身とならないようにしてきたし［山根 2003, 37］，州レベルの大臣などの任免でも民族以下のエスニック・グループが考慮される。このようにパキスタンの異なる民族またはコミュニティ間では，対立ばかりが強調され，その対立が国家の発展にとってマイナスと見なされてきた。もちろん，異なる民族またはコミュニティ間の対立そのものは否定しないが，多様性をマイナスであるとする考え方に捕われてしまう背景には，民族や宗教の対立のみに問題の原因を求めたことがあるのではないかと評者は考える。第６章，第７章は，一見したところ民族または宗教間の対立と見える問題が，実は国家の無力や階層間の分断といったその他の要因に帰しうるという新たな視点を与えてくれるが，そのような視点は，結果として民族の潜在的可能性を補強することにもなるだろう。

おわりに

本書では，以上のような潜在的可能性をもつパキスタンの多様な民族・地域とその自律性が，国家と国民との間のギャップを説明するというアプローチをとっている。そのギャップは，別の観点からも説明ができるのではないかと評者は考える。第６章，第７章で言及される階層間の分断や国家の無力は，一見民族または宗教間の対立に見える問題の根本的な要因たりえると同時に，国家と国民との間のギャップも説明しうる。冒頭で述べたような人々の政治に対する期待のなさは，政治家の腐敗や無能といった中央政府の無力に大きく起因するが，実際，国民が税金を支払って国からの公共サービスを期待するという相互依存関係は希薄である。2001年11月からの税改革以降も，税収は対GDP比で13%前後とあまり変化しておらず，脱税や徴収官の汚職が深刻であることを伺わせる。その一方で，非農業セクター被雇用者の３分の２以上が，そもそも徴税対象としてカウントされていないインフォーマル・セクターで働いている。脱税やインフォーマル小・家内工業の生産活動といったインフォーマル経済は，国家と国民との間のギャップを説明しうるだろう。Nadeem（2002, 201）は，パキスタン一国としての脆弱な経済パフォーマンス(注1)と，その割に人々の生活が豊かになっている現象を説明する要因として，無視できない規模のインフォーマルな経済活動の存在を指摘する。パキスタンの国家と国民との間のギャップは非常に興味深いテーマである。本書が「民族・地域の自律性」に着目して民族の潜在的可能性を明らかにしたのは，それがギャップを説明しうるという視点からであったが，今後も，国家と国民との間のギャップを解明することを問題の出発点としたパキスタン研究は必要であり続けるだろう。

（注１）　例えば，1996/1997～2000/2001年度５年間の１人当たり実質GDP成長率の平均が0.9%といったことが挙げられる。

文献リスト

＜日本語文献＞

井上あえか 2000.「ムシャッラフ軍事政権成立の背景」内川秀二編『パキスタン――軍事クーデターの背景――』アジ研トピックリポート No.38　アジア経済研究所 1-14.

加賀谷寛・浜口恒夫 1977.『世界現代史10　南アジア現代史Ⅱ　パキスタン・バングラデシュ』山川出版社.

佐藤宏 1992.「パキスタンの連邦制と官僚制度――民族問題の視点から――」山中一郎編『パキスタン

における政治と権力――統治エリートについての考察――』研究双書　No.415　アジア経済研究所 181-254.

山根聡 2003.「活力の源となる多彩な民族――人々・民族・言語――」広瀬崇子・山根聡・小田尚也編著『パキスタンを知るための60章』明石書店 34-39.

＜英語文献＞

Nadeem, A. H. 2002. *Pakistan: The Political Economy of Lawlessness.* Karachi: Oxford University Press.

（アジア経済研究所地域研究センター）